

# 最新事情

**秘書技能を基礎に、社会で活躍するための実践力とプレゼンテーションシヨンを磨く**

## 長崎女子短期大学

(長崎県長崎市)

平成28年に創立50周年を迎えた長崎女子短期大学。卒業後は学生の約95%が県内で就職し、地元では「就職の長崎女子短大」として知られている。生活創造学科の栄養士コース、ビジネス・医療秘書コース、幼児教育学科があり、いずれも「実践力の育成」を目標に掲げてきた。今回は同短大の生活創造学科ビジネス・医療秘書コースの取り組みについて伺った。



長崎市街地を見下ろす高台にある長崎女子短期大学キャンパス。どの学科も長崎県内からの入学者がほとんどだ

### 30コマの「秘書実務」で 実技を徹底

長崎女子短期大学生活創造学科ビジネス・医療秘書コースには、一般企業への就職を目指す学生と医療事務を目指す学生が入学してくる。コース長の濱口なぎさ准教授は就職の状況について「本コースの学生は、例年、6〜7割が企業や病院の事務職として、他には販売職や営業職として就職しています」と説明する。長崎県は地震が少なく災害に強いことから大手保険会社などがコールセンターや第二本社機能を備えたオフィスを設置している。そういった企業も、事務職の基本を学んだ同コースの卒業生の就職先になっているのだ。

秘書科目は同コースのカリキュラムの核の

一つとなっている。必修科目である1年前期「秘書概論」では基礎知識として秘書検定2級の内容を指導。それを基に1年後期の「秘書実務1」と2年前期の「秘書実務2」の合計30コマで、ロールプレイングなどの実技を繰り返して、実際に技能として身に付ける。

これらの科目を指導する講師の江頭万里子先生は「社会に出た際に、円滑に問題なく仕事に取り組めるようになってもらうのが目標です。秘書検定では、秘書に限らず事務職として就職した際にすぐに使える知識や能力が身に付きます。社会人として働くためのベースとして非常に役立ちます」と話す。「これは知っている」「できる」という自信は、初めて社会に出たときに、自分の支えになる。

「秘書概論」「秘書実務」の教室となる秘書実習室の壁には大きな鏡がある。これは江頭先生の希望で設置してもらったものだ。これらの科目は全員がスーツを着用して受講する。開始前にこの鏡で身だしなみを整えてから着席することになっており、ロールプレイングの際も鏡に全身を映して確認しながら行う。「客観的に自分の姿を確認する習慣がつくと、きちんとしなければならぬ」という意識が出てくるようです。形を整えようと心もついてくる。それを期待しています(江頭先生)。

「秘書実務」では敬語をはじめとする話し方、聞き方、指示の受け方や報告の仕方、電話応対、来客応対、文書作成や慶弔業務など、一通りの

生活創造学科ビジネス・医療秘書コース長の濱口なぎさ准教授。「秘書検定の知識や技能は、就職活動のため、そして社会人になってすぐに必要な知識や技術を客観的に測るための指標になると考えています」



講師の江頭万里子先生は、秘書としての勤務経験を基に必修科目「秘書概論」「秘書実務1・2」を担当する。「学科としての目標は秘書検定2級ですが、ぜひ準1級まで受験してほしい。挑戦した学生は立ち居振る舞いが確実に変わります」



内容についてスムーズな行動ができるように繰り返し演習を行う。学生が一番つまずきやすいところはやはり敬語だ。「毎年試行錯誤しながらよりよい習得方法を考えています」と江頭先生。昨年度は、基礎知識をベースとした説明動画とワークシートを作成して、授業前に動画を見て予習してもらい、対面授業ではそれを基にディスカッションやロールプレイングを行う「反転授業」で指導した。

「ワークシートには、秘書のセリフとして間違いの表現を記載しておき、動画を見てどこがどのように間違っているかを指摘させます。『これは誰の行動なのでここは謙譲語になる』『こ

れは誰の行動なので尊敬語になる。そしてこの形の尊敬語を使って表現するのがよい」という具合です。授業ではこれを基に、皆の前で説明してもらいます。なんとなくではなく、仕組みから理解してもらおうには、よい進め方なのではないかと思えます（江頭先生）。

## 社会人としての基礎力を 秘書検定で客観的に評価

秘書検定について、コースとしての目標は卒業までに2級に合格することとしているが、受験時期を教員から指定することはない。「自分の学びがそこまで達していると思ったら受験してください」と江頭先生。「秘書概論」で知識を付けて2級を、「秘書実務」で実技の自信を付けてから準1級を受験する学生が多いそうだ。

加藤彩仁美さとみさんは商業高校在学中に秘書検定2級に合格。同短大に入学し、1年生の6月に準1級に合格した。高校で秘書検定を学んだとき、これは社会ですぐに使える知識と技能だと感じ、短大に入ったら準1級を受けようと思った。「授業はまだ実技まで進んでいなかったため、江頭先生から課外で指導を受けて挑戦しました」と話す。他の学生と同様、加藤さんも、難しかったのは敬語だと言う。

「特に準1級面接試験の課題で、とっさに言い換えるのが大変でした。頭では覚えていてもすぐに言葉が出てこなかったり、二重敬語になっ

てしまったり、尊敬語と謙譲語が逆になってしまったり。言い慣れていないと出てこないものだと改めて思いました。面接試験の練習で、しっかりと敬語が身に付いたと思います」。

資格は「客観的な評価になる」と先生方は口をそろえる。自分の自信になるだけでなく、それだけの努力をした人間だと相手に自分をアピールする一つの手掛かりにもなる。

「強制することはありませんが、さまざまな資格試験に積極的に取り組んでほしいと常々伝えていきます」（濱口先生）。



2年生の加藤彩仁美さん。「経理職を目指しています。社内の人とのやりとりが多くなると思いますが、秘書検定準1級で学んだことを、上司や先輩との人間関係づくりに生かしていきたいです」



前期・後期の終わりに開催されるプレゼンテーション大会。2年間を通じて、全員が一人であるいはグループで繰り返しプレゼンテーションを行うことになるため、「最後は皆、堂に入った発表をするようになります」と先生方





2年後期の「事務管理」(令和5年度からは「ビジネスプランニング」)では企業と連携して商品の企画開発を行う。令和4年度はオリジナルアロマ商品を企画。「長崎らしさ」をコンセプトに、アロマウッ드의デザインは教会、路面電車、尾曲がりネコの形を採用。香りも学生が決め、市内の文房具店で販促活動も行った



## 2年間で実践力とプレゼンテーション力を育成

同短大で教育目標としているのが「実践力」の育成である。秘書科目での演習や検定への取り組みと共に、オフィスで必須のパソコン技能の習得や検定試験にも力を入れる。さらに成果を上げるため、令和3年度入学生から「実践型教育プログラム」を開始した。2年前期までに卒業に必要な単位の9割を取得し、最後の半期はそれぞれの目標に合わせて実践を行うというものだ。「科目で学んだことや身に付けたことを学外に出て応用する、検定試験上位級に挑戦するなど、学生が各自で目標を設定して取り組みます。就職活動も並行し、内定先でアルバイトとして職場体験をさせてもらう学生もいます。学外でチャレンジし、また学校に戻ってきて学び直したり教員に相談したりすることで、より確かな力にします。

てもらおう期間としています」(濱口先生)。

同コースでもう一つ目標にしているのが「プレゼンテーション力」の育成だ。各科目内で発表の機会を設ける他、大きな発表会もある。前期・後期の最後に2学年合同で行う「プレゼンテーション大会」だ。

1年前期には「プレゼミナール」でワーク・ライフ・バランスや女性の働き方を学び、そのまとめとして、自分が将来どのような仕事に就きたいかなどを送りたいかを考え、それに合う長崎県内の企業を一人一人が調べて発表する。1年後期には「ゼミナール」で、前期の「プレゼミナール」で調べた企業から幾つかを選んで実際に訪問して話を聞き、まとめて発表する。これはグループになって行う。

2年前期には、地元テレビ局から動画作成の手ほどきを受け、30秒の長崎県のPR動画を一人1本作成。どのような人に何を伝えたいかを考えターゲットを絞り、現地に行つて撮影、編集する。これを各自が発表する。2年後期には、実践型教育プログラムで取り組んだことや「事務管理」(令和5年度からは「ビジネスプランニング」)で企業と連携した商品の企画開発について、あるいは長崎労働局等が主催するイベントに学生運営委員として参加したボランティア活動についてなど、それぞれが取り組んだことを報告する。

このようなプレゼンテーションの基礎として、1年前期には元アナウンサーの講師から



長崎県中小企業家同友会の協力を得て、学内で企業人との対話の機会(上)や、模擬面接会(左)も設けている。「地元の若い人に県内で頑張ってもらいたい」と、熱意を持って学生と関わってくれる企業も多い



話し方や伝え方を学ぶ必修科目「スピーチコミュニケーション」を設けている。さまざまな伝え方があることを実践して学ぶ内容で、ここでも毎回、全員にスピーチの機会がある。

入学時点では人前で話すのが苦手な学生もいるが、濱口先生は「意図して、多くの科目で発表せざるを得ない状況を作っています。『発表を重ねるうちにだんだん苦にならなくなつた』と言ってくれる学生も多いですね」と語る。プレゼンテーション大会では、1年生は先輩の様子を見ることが「あんなふうになれるんだ」と目標を持ち、2年生は後輩を見ることで「1年前に比べたらこんなことができるようになった」と自分の成長を実感する。

身近な人の姿から学び合う姿勢が、確かな力の獲得につながっている。